

第17回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



高校生の部 優秀賞 受賞作品

『崖っぶちで見つけた自分』

東京都

千代田区立九段中等教育学校

四年 坂本 一希

崖っぷちで見つけた自分

千代田区立九段中等教育学校 四年
坂本 一希 (さかもと いつき)

私はいつも自分の人生を「崖っぷち」と感じている。周りから見れば普通に見えるかもしれないけれど、私にとっては、毎日がギリギリの綱渡りだ。うれしいことが起こったら、必ず小さないやなことが起こる。身近な例でいえば、友達と遊ぶ約束をしたとき、遅刻しないように家を出発できたとしても、余裕をもっていなければならないほど電車が遅延したり反対の方面の電車に乗ってしまったたりする。すべてがうまくいくということではなく、いつもハプニングと隣り合わせの生活。

中学に進学してからも、その「崖っぷち感」は消えることはなかった。部活では思い切り自分の力を発揮することができず、試合でミスを重ねるたびに自分はチームにとって重荷なのではと考えてしまい、胸が締め付けられた。家では、親が仕事や家庭のことで忙しく、私の悩みを深く聞いてもらえることは少なかった。

高校に上がり、体育祭で応援団をやることになった。それは私が中学の頃から先輩たちを見て憧れていたもので、学ランを着て踊る迫力ある演武に自分も参加できることにわくわくしていた。休みの日も放課後も何度も練習を重ね、ついに選抜オーディション二日前。ここに来て私の崖っぷちが邪魔をしてくる。友達と衝突して、ひざを痛めてしまったのだ。応援団の演武にとって一番大切なのは基本姿勢。その基本姿勢は膝への負担は免れないものであった。基本姿勢も綺麗にできないのにオーディションに受かるはずがない。どうせ今度も自分の力を発揮できないで終わるのだろう。いつものことだし仕方がないと思うと同時に、高校生にもなつてずっと同じことに悩まされ、それに諦めるだけの自分に悔しくなった。ここであきらめなかったら、もしかしたら自分を変えることができるかもしれない。私は今の自分にできる最大限のことを考えた。そして気づいたのは、一つ一つの動きに緩急をつけることだ。これならひざを痛めていても応援団の迫力を表現できる。少し希望がみえたような気がした。オーディション本番の日。私は膝の痛さなど忘れるほど集中して演武をするこゝとができ、結果は合格。あの時あきらめていたら絶対に得られなかった結果だった。けがをして一度立ち止まったことで、自分に足りていない部分、もっと成長できる部分を見つけることができたのだ。

この体験から私は、「崖っぷち」への考えが変わった。人生の「崖っぷち」は、決して悪いことばかりではない。むしろ、その崖っぷちに立つことで、自分の力や可能性に気付くことができるのだ。怖さを感じるからこそ、全力で挑戦する価値がある。私の人生はいつもギリギリだけど、そのギリギリさが私を成長させてくれている。

今でも、思い描いた通りにならないことは多い。それでも私は、「崖っぷち人生」というキャッチコピーを誇りに思っている。なぜなら、崖っぷちに立つことでしか見えない景色もあるからだ。自分の本当の強さ、これまで見えなかった新しい可能性。それらはめげずに本気で挑んで初めて得られるものだ。

これから先、まだまだ予測できない困難が待っているだろう。それでも私は、恐怖を抱きながらも一歩一歩、崖っぷちを歩き続けるつもりだ。崖の向こうに広がる未来は、きっと私が想像する以上に鮮やかで希望に満ちているに違いないのだから。